開発教育地域セミナー2026 in 新潟
「広げよう！ 新たな見方と温かい輪」報告書



日時：2026 年 9 月 12 日（土） 10:00～17:30
場所：ミライエ長岡・長岡市国際交流センター「地球広場」・まちまち、ときどきカフェ。
共催：特定非営利活動法人にいがた NGO ネットワーク 国際教育研究会 RING
（「開発教育地域セミナー2026 in 新潟」実行委員会）
認定 NPO 法人 開発教育協会（DEAR）
後援：新潟県教育委員会・JICA 東京・長岡市・長岡市教育委員会
協力：School Voice Project・長岡市国際交流センター「地球広場」

開発教育地域セミナー2026 in 新潟
開催にあたって

ここ新潟は、一握りの人や団体が国際理解教育／開発教育に
熱心に取り組んでいる状況がありました。
そこで、2012 年に
にいがたＮＧＯネットワーク内に国際教育研究会（後のＲＩＮＧ）が発足し、
ＪＩＣＡ教師海外研修に参加した教員が中心となって担うようになって早 10 年。
ＲＩＮＧ結成 10 周年、セミナー開催 50 回目という節目に、
ずっとお世話になっている開発教育協会（ＤＥＡＲ）さんと共催で
開発教育地域セミナー2026 in 新潟を開催できたことを
心より嬉しく思います。

この記念すべきセミナーでも、ＲＩＮＧのビジョン
「新潟県内において持続可能な社会のための担い手および教育実践者を増やす」
とミッション
「新潟県民が持続可能な社会に向けて考えを深め、
身近なところから行動を起こすきっかけとなる場や環境をつくる」を旗印に、
開催テーマである「新たな見方と温かい輪」が広がるように
新潟にかかわる様々な人や団体や取組を詰め込みました。

１日開催という大掛かりなセミナーでしたが、
実行委員会はふだんのＲＩＮＧそのものです。
それは「やらされている」「やらなきゃ」ではなく
「やりたいからやる」「やれる範囲でやる」というスタンスで、
自分たちの「ワクワク」をスタートに
強制や無理をしない「ゆるさ・余白」をもちながら
様々な機関、団体、人との「連携・協働」を大切にしてきました。

その結果、100 名を超える多くの方々が集い、
温かくてゆるやかな雰囲気に包まれながら
自己開示とフィードバックが活性化され、
気づきや学びが深まった大変充実した１日となりました。

子どもの頃、何かの節目によく使っていた「思い出」という言葉。
大人になった今でも
「かけがえのない思い出」として
本セミナーを振り返れる幸せを感じながら、
その軌跡をここに綴ります。

関わってくださった全ての皆さまに感謝を、
そして、一人でも多くの人に知恵と情熱が届くことを願って。

開発教育地域セミナー2026 in 新潟
実行委員長　　小黒　淳一

プログラム概要

本セミナーでは、新潟県内の様々なリソースを活用しながら、教育関係者に限らず、広く市民や学生の平和や人権、グローカル(地球的規模で考え足元から行動する)への意識や行動を高めることを目的に、以下のプログラムを構成した。

時間	プログラム内容
10:00〜10:15	開会式（挨拶、ＲＩＮＧについて、アイスブレイク、日程確認など）
10:30〜12:00	■ワークショップ 第１ワークショップ：「世界がもし 100 人の村だったら」 ※開発教育教材『ワークショップ版　世界がもし 100 人の村だったら　第７版』(開発教育協会, 2025)を使用 担当：ＲＩＮＧメンバー 第２ワークショップ：「甘くて苦いチョコレートの真実」 担当：国際交流ファシリテーター 新潟国際情報大学チーム 第３ワークショップ：「知ろう！作ろう！地球にやさしいカレーライス」 担当：ＲＩＮＧメンバー
12:00〜13:00	昼食・休憩
13:00〜14:30	■基調講演：武田緑さん（学校ＤＥ＆Ｉコンサルタント） 「ふつうをアップデート 〜誰もが過ごしやすい学校・地域・社会づくりをめざして〜」
14:30〜14:50	休憩
14:50〜16:50	■プレゼンテーションコンテスト 「新潟発 世界行き：持続可能な地域・社会づくりに向けて」 上記テーマに関することに取り組んでいる個人や団体（小学生から大人）によるプレゼンテーションコンテスト。計７組が出場。
16:50〜17:00	休憩
17:00〜17:20	■全体会 「振り返りと未来デザイン」
17:20〜17:30	閉会式（挨拶、諸連絡など）
18:30〜	交流会

第１ワークショップ「世界がもし 100 人の村だったら」

ファシリテーター：関川　芙美香（せきかわ　ふみか）新潟市立山潟小学校
増田　有貴（ますだ　ゆき）阿賀野市立水原中学校

１．プログラムのねらい

「100 人村」を通して、人口・大陸・環境・識字・格差を体感し、世界の課題を自分事として理解し、気づきや行動の一歩につなげることをねらいとした。

２．実施内容

１）ワーク

役割カードを使いながら、①人口、②大陸、③環境、④識字、⑤格差の５つのワークを体験した。参加者１人を約３億人として捉え、クイズや意見交流を交えつつ進めた。近年の世界的な自然災害についても扱いたかったため、環境のワークを取り入れた。識字のワークでは、ネパール語で書かれた「薬」「水」「毒」のコップを使い、文字が読めない状況を体験した。

２）振り返り

『世界がもし 100 人の村だったら ＥＤＩＴＩＯＮ2008』を朗読し、気になった箇所を共有した。付箋に書いた気持ちや気づきを振り返りとしてまとめ、全体で共有した。

３．参加者の様子と感想

参加者は 30 人程度で、小学生から大人まで幅広い参加があり、世界の現状を「体感する」学びを楽しんでいた。「アジアの人口密度ってこんなに高いの？」など多くのつぶやきや驚きの声があった。振り返りでは、世界の現状を知り、何もできない悔しさや難しさを感じつつも、多くの人と一緒に考えられることへの安心感や「まだ間に合う」と前向きな気持ちが共有され、温かい雰囲気で学びが深まった。

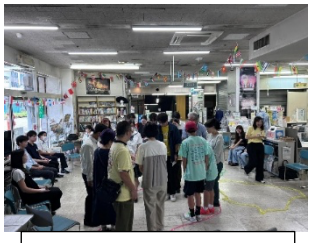
４．プログラムを終えて

100 人村の各ワークは相互に関連しており、人口密度と二酸化炭素排出量が比例していない現状や、富の分配では「少ない側」にこそ目を向ける必要があることなど、構造的課題を体感的に理解する時間となった。体感する学びや数値から読み取る学びなど、複数の面から世界の現状を捉えることができた。高校生からは「学校でもやりたい」と声が上がり、大陸のワークで使用した紐を持ち帰るなど、行動への一歩につながった。プログラムのねらいは十分に達成された。

（報告者：渡邊　恋子）



気もち（黄色）・気づき（ピンク）



大陸ごとに分かれて
人口の偏りを体感する様子



二酸化炭素排出量を
紙で表し、話し合う様子



ネパール語で書かれたコップを
手に取り、味見する様子

第２ワークショップ「甘くて苦いチョコレートの真実」

ファシリテーター：国際交流ファシリテーター　新潟国際情報大学チーム（７名）
　国際交流ファシリテーター事業は、 一方的に知識を伝達する形式ではなく、ワークショップ形式で、派遣先の児童・生徒と大学生が共に考え、国際理解教育を実施しています。本事業のなかでは、ワークショップは学ぶための手法であり、場として捉えています。
　※ 新潟国際情報大学 国際交流ファシリテーター事務室ホームページ参照

１．プログラムのねらい

　本ワークショップを通して、フェアトレードについて考えを深めることをねらいとし、フェアトレード商品の中でも身近なチョコレートの裏側にある児童労働に目を向けた。その現実に目を向け、当事者意識を持ってもらうことで、自分たちに何ができるかを考え、行動するきっかけになることを目的とした。

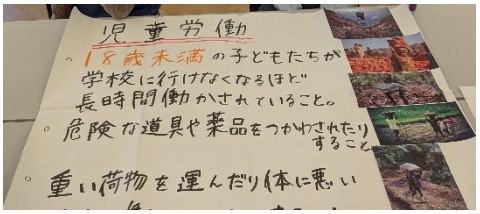
２．実施内容

１）アイスブレイク　チロルチョコビンゴ
　９マスのビンゴカードに、司会が引いたチロルチョコとビンゴカードのチロルチョコが合っていればマスを開ける。３つ揃えばビンゴ。
　ビンゴ後に１つチロルチョコを食べてもらい、チョコのおいしさを再確認してもらう。



チロルチョコビンゴ後のチョコ試食

２）問題提起
　チョコは何からできているか、誰が作ってどのような仕事をしているかを問いかけ、問題を提起する。
　カカオがどのようにして消費者に届くのか、写真や図などを通して理解を促す。



児童労働に関する説明資料

３）動画の視聴と児童労働体験
　ガーナでのカカオ生産・児童労働についての動画を視聴する。そして児童労働についての解説。その後、ガーナの子どもたちが運搬しているカカオの重さの袋を持って児童労働を体験する。児童労働での賃金についての説明。

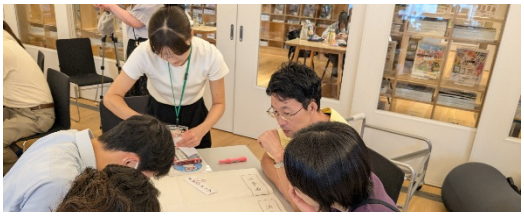


児童労働体験

４）フェアトレードの紹介と商品の観察
　フェアトレードの定義や基礎知識、実際のフェアトレード商品を見て理解を深める。

５）日本と海外のフェアトレードの比較と課題
　クイズ形式で日本と海外のフェアトレードの知名度、普及の差について学ぶ。そして、フェアトレードの知名度向上のために自分たちにできることを考え、付箋に書き、模造紙に貼っていく。

６）ギャラリーウォークと班内での感想の共有とまとめ
　ほかのグループの意見を見て回り、感心した意見などはメモを取り、グループ内で共有する。新潟国際情報大学がフェアトレード大学であることや、児童労働やフェアトレードに関してまとめた説明を聞いて閉会。


フェアトレード商品の観察の様子


「なぜフェアトレードの知名度が上がらないのか」と「知名度を上げるために自分たちにできること」を議論

３．参加者の様子と感想



模造紙に貼られた参加者の意見

　新潟国際情報大学の学生によるファシリテーションのもと、円滑かつ分かりやすく児童労働やフェアトレードに関しての説明があり、新たな知識を得ることができた。参加者は「なぜフェアトレードの知名度が上がらないのか」と「知名度を上げるために自分たちにできることはなにか」という問いに対して、多くの意見を出し合い、模造紙いっぱいの付箋が貼られた。「お土産などの贈答品でフェアトレード商品を選び、普及に貢献できるのではないか」や「学校給食にフェアトレード商品を使えないか」など、具体的な提案が出され、「フェアトレード」への関心を高める有意義なワークショップとなった。

４．プログラムを終えて

　大学生のワークショップに向けての準備やファシリテーションが秀逸で、参加者は多くの知識や気づきを得て今後の自らの在り方を考える機会となったと思われる。ＲＩＮＧは今後も、国際交流ファシリテーター事業と連携し、新潟県の国際理解教育や国際交流に尽力していきたいと感じるプログラムとなった。

（報告者：池亀　元喜）

第３ワークショップ
「知ろう！作ろう！地球にやさしいカレーライス」

ファシリテーター：
関　愛（せき　めぐむ）高校教員
大山　達也（おおやま　たつや）ＪＩＣＡ国際協力推進員新潟デスク
大野　めぐみ（おおの　めぐみ）英語教室講師
高橋　美里（たかはし　みさと）市議会議員

１．プログラムのねらい

・カレー作りを通して、「地球にやさしい」というテーマについての理解を深める。
・「プラごみ」「フードマイレージ・地産地消」「フードロス」を主なキーワードとし、環境負荷を減らすための行動を考えるうえでのヒントを得る。
・班のメンバーで会話を広げたり一緒に作業をしたりすることを通して、楽しみながら学ぶ。

２．実施内容

１）調理

４つのグループに分かれて、注意事項や活動のねらいなどを確認した後、自己紹介を行った。その後、各グループで使用する食材（肉、卵、野菜、調味料など）について、ワークシートをもとに考えた後、実際に並んでいる食材から選んで調理を開始。調理終了後の「もぐもぐタイム」では、他のグループのカレーも試食し合った。そして、グループごとに全体で味や工夫についての感想を紹介した。

２）ミニレクチャー・振り返り

振り返りでは、食べ物が生産地から食卓まで届くまでのコストや温室効果ガス発生量などに触れ、フードマイレージという言葉を紹介した。また、国産と外国産の食物どちらを選んだか、といった質問から日本の食料自給率に触れたり、多様なカレールーの産地や原材料（米粉など）に触れたりした。また、その際には「何を基準に食材を選ぶか」といった各自の価値基準についても話し合うことができた。

３．参加者の様子と感想

小学生から大人まで、幅広い年齢層の参加者がくじ引きによってグループとなり、食材選びから調理の方法に至るまで、創意工夫を重ねながら取り組んでいる様子が印象的であった。ある班では、高校生が「地球にやさしい」だけではなく、カレーの見た目の美味しさも追求し、トッピングの野菜を素揚げするなど、周りのグループを驚かせるような工夫をする様子もみられた。参加者からは「美味しいカレーができた。食事を作ったり、食材を選んだりするところから自分たちにもできることを実行に移していこうと思った」などの感想をいただくことができた。

４．プログラムを終えて

私たちは毎日欠かさず食事をとり、そのために様々な食材を調達する。その場所は

スーパーマーケットだったり、地元の直売所あるいは自分で作っている人もいるだろう。大半の人はお店で購入するであるが、その際に値段は見ても産地や生産者がどのような工夫をして作っているかまで気に掛ける人は少ない。今回のワークショップを通して、ひとりでも食材選びの段階から地球環境のことを考えて日々の食事を楽しむ人が増えてくれたら嬉しく思う。また、そのような人を少しずつ増やしていくためにも、ＲＩＮＧの活動を継続して実施していく意義があると感じた。

（報告者：大山　達也）



「選ぶ」ことを意識できるよう
さまざまな食材を用意しました



みんなでカレー作り



出来上がったカレーの試食



「地球にやさしいカレーの話」を
聞きながら作ったカレーの振り返り

基調講演「ふつうをアップデート　～誰もが過ごしやすい学校・地域・社会づくりをめざして～」

ゲストスピーカー：武田　緑さん（たけだ　みどり）
　「ＤＥ＆Ｉ（多様性・公正・包摂）」をテーマに研修・講演・執筆、ワークショップの企画運営、学校現場や教職員への伴走サポート、教育運動づくり等に取り組み、研修は全国の学校や教育委員会、教育研究団体などで実績多数。School Voice Project 理事。

１．プログラムのねらい

　一人ひとりの「ふつう」は異なり、自分にとって当たり前のことが他者にとっても当たり前とは限らないことに気づき、学校のルールや環境、社会の仕組みに目を向けるとともに、互いの思いや意見を尊重しながら、過ごしやすい学校・地域・社会の在り方について考える。

２．内容



「ふつう」について回答する様子

１）一人ひとりの「ふつう」の違いについて
　身近な事柄についてＹＥＳ・ＮＯで意思表示をする活動を通して、人によっての「ふつう」「当たり前」が違うことに気づいた。また自分にって当たり前のことが、他者にとっても同じとは限らないことを考えることができた。

２）誰もが過ごしやすい社会・学校づくりについて
　左利き・右利きなどの具体的な例を通して、社会や学校の仕組み、環境が人によっては不便さや困りごとを生み出していることについて考えた。「個人モデル」から「社会モデル」へ転換することの必要性、子どもの声や意見を大切にした学校のルールや慣習、環境の見直し、誰もが安心して自分らしく参加できる学校づくりについて話をしていただいた。



「ふつうとは何か」回答する参加者

３．参加者の様子と感想

　身近な事柄を通して、それぞれの考え方や感じ方の違いに触れることができていた。「社会の『ふつう』は誰が決めているのか」という問いに対して、学校や社会のルールや環境を見直す視点も大事だという気づきがあった。講演後にも、「ふつうって難しい」と口にする姿があった。自分にとっての当たり前が、他者にとっても同じではないことに気づき、これまでの考え方を見直す大切さを感じていた。そして、困りごとを個人の問題として捉えるのでなく、社会の仕組みにも目を向けることへの必要性を実感していた。

４．プログラムを終えて

　自分にとっての「ふつう」を見つめ直し、社会の「ふつう」について考える時間になった。そして、それは個人の特性だけでなく、環境や状況、ルール、やり方によっても変わることに気づいた。社会や環境の側を変えるという視点に触れ、一人ひとりの「ふつう」について対話することの大切さについても考えることができた。

（報告者：西家　久美子）

プレゼンテーションコンテスト
「新潟発 世界行き：持続可能な地域・社会づくりに向けて」

１．プログラムのねらい

地域の現状から国際的な課題を、あるいは国際的な問題から地域の課題を捉え直し、持続可能な社会のために自分たちができるアクションを発表し、互いに学び合うことで、より良い社会を共に考える機会とすること。

２．実施内容

１）プレゼンテーションコンテスト

それぞれのチームがこれまでのグローカルな活動について、発表５分、質疑応答３分の発表を行った。参加チームの概要は以下の通り。

チーム名・個人名（敬称略）	発表テーマ	参加者概要
ミラクルファイブ	貧困問題解決と質のよい教育	魚沼市立湯之谷小学校６年生５名
新潟第一高校	今の自分にできること	新潟第一高校１年生４名
伊藤周平	未来を見据えた人材育成	AND project・中学校教員
ミラクルルーキーズ	フードロスについて考えよう	魚沼市立湯之谷小学校６年生４名
Flora Bouquet	世界を泳ぐ錦鯉	附属長岡中、東北中２・３年生３名
17 colors	延長、延長、また延長 ＰＫ戦で決めるっしょ	新潟青陵高等学校２年生５名
山本みゆう	世界中の子どもに笑顔の居場所を	新潟青陵短期大学１年

２）審査

審査員は、東京都市大学大学院教授・佐藤真久氏、開発教育協会（ＤＥＡＲ）様、ＪＩＣＡ新潟デスク様、ＲＩＮＧ小黒・増田の計７名で、５分間の発表と３分間の質疑応答について、「グローカルな視点」「探究力・行動力」「影響力」「持続可能性」「発信力・表現力」の５観点により審査した。

３）講評・表彰

東京都市大学大学院教授・佐藤真久氏により、各発表者への講評をいただいた。

全体総括として、課題解決において重要な４つの視点として「つなげる」「捉え直す」「意味づける（地域文脈への落とし込み）」、そして自他ともに「変える・変わる」姿勢が全発表に共通して見られたと総括していただいた。

３．参加者の様子と感想

１）発表者について

小学生から社会人までの幅広い年齢層とテーマによるプレゼンテーションとなった。

①ミラクルファイブ：質の高い教育の大切さとそれを阻む貧困問題の解決を結びつけて考え、アフリカの貧困の構造に着目して募金活動や文具の寄付を呼びかける行動を起こすことを発表した。

②新潟第一高校：小学生のメッセージをきっかけに平和への学びを深め、平和のためにできることとして、アフガニスタン出身の中学生の高校受験のための学習支援をチームで行なっている様子を発表した。
③伊東周平：自律する子どもの育成を目指し、地域でのバスケットボール指導の取組みを「電車型の学び」ではなく、「自動車型の学び」として展開し、子どもの主体性を引き出す数々の取組について発表した。
④ミラグルーキーズ：日本の食品ロスの多さに着目し、環境にも悪影響が出ることを調べ上げ、給食の残食を減らす取組を校内で展開。日常からできる食品ロス低減に役立つ方法についても発表した。
⑤Flora Bouquet：ファストファッションの衣料品の生産と消費の悪循環に着目し、フェアトレードの大切さを訴えた。自分たちができることとして、地域の文化である錦鯉を取り入れたポーチの作成について、ローカルな関係性を重視した提案を発表した。
⑥17 colors：気候変動や海洋問題、難民問題など多角的な視点を繋ぎ、未利用魚の活用、服のリユース、ゴミ拾いなど様々なアクションを実践してきた様子を発表した。
⑦山本みゆう:共働き率が全国平均より高い新潟県において、幼児教育を中心とした子どもの居場所づくりに着目した。子どもの居場所づくりは世界共通の課題であることが分かり、先進的なオーストラリアでの学びの展望について発表した。



最優秀賞：新潟第一高校



DEAR 賞:ミラクルルーキーズ



RING 賞：Flora Bouquet

２）参観者について
参観者より感想をいただいたので紹介する。
・「子どもが初めてプレゼンに参加しました。この日のために、学校以外の場でも自分の思いを深め、仲間と意見を出し合って作り上げていく姿を見て驚きました。当日は、他の方々の発表を見て、プレゼンの仕方や工夫に感心し、憧れを抱いていました。たくさんの人に自分の思いを伝えるためにどうしたらいいのか、どうしたらより聞いてもらえるのか等、沢山の事を学べたようでとても良い経験ができました」
・「小中高校生、大学生、社会人のプレゼンテーションが、一つひとつ工夫されており、興味深かったです。自分事として捉えることの大切さを改めて学ばせていただきました」

４．プログラムを終えて

今回ＲＩＮＧとして初のプレゼンテーションコンテスト開催であった。全県より７組の発表者が登壇し、グローカルな視点でこれまで取り組んできたこと、これから取り組むことなどの発表があった。学校の教育課程や既成の活動にとらわれずに、発表者自らが主体性を発揮した取組についての発表が多く、主催者側として大変勇気づけられる思いであった。所属校の枠を求めず、参加チーム編成を自由にしたことで、より主体的な取組が促されたと考えている。また、小学生の参加も認めたことで、より幅広い年代の取組が工夫を凝らして発表され、発表者自身も他の発表者から刺激を受けていた。さらに、プレゼンテーションコンテスト後にも活動の継続が見られている。関係者の皆様に心から感謝を申し上げると共に、次年度以降の開催についても挑戦していきたい。

（報告者：渡辺　登）

全体会「振り返りと未来デザイン」

ファシリテーター：
増田　有貴（ますだ　ゆき）阿賀野市立水原中学校
池亀　元喜（いけがめ　もとき）新潟県立高田農業高等学校

１．プログラムのねらい

プログラム内容の振り返りと、参加者同士の「今日のＯＮＥ　ＷＯＲＤ」や「明日からの一歩」の共有を通して、それぞれが学びを内省したり他者と深めたりする機会とする。

２．実施内容

１）第 50 回ＲＩＮＧセミナーダイジェストレビュー
１日のプログラム（３つのワークショップ、基調講演、プレゼンテーションコンテスト）について、各担当者より、実施内容や参加者の様子等が伝わるような１分間のリレー形式ダイジェストレビューを行った。その際、スライドには各プログラムの写真や参加者からの振り返りコメントの付箋を投影し、各プログラムの会場の雰囲気や学びの様子が伝わるようにした。



ワークショップ「世界がもし 100 人村だったら」のダイジェストレビュー

２）「今日のＯＮＥ　ＷＯＲＤ」「明日からの一歩」
～振り返りと共有～
参加者は、「振り返り＆未来デザインワークシート」の左半分に「今日のＯＮＥ　ＷＯＲＤ（本日のセミナーで最も心に残った言葉）」を、右半分に「明日からの一歩（明日からやってみたいこと）」を記入した。その後、近くの参加者３～４名でグループになり、「このセミナーの前と今で感じる自分の変化」も添えて共有し合った。最後に、ファシリテーターより各グループから聞かれた言葉を紹介し、短時間ではあったが全体共有とした。



ＲＩＮＧセミナーの振り返りでおなじみの「今日のＯＮＥ　ＷＯＲＤ」と「明日からの一歩」の説明

３．参加者の様子と感想

１）対話の様子
最終プログラムであるプレゼンテーションコンテストの観覧者も合わせて 120 名ほどが「振り返りと未来デザイン」の対話に参加した。中には仲間同士のグループもあったが、親子で、教員と生徒で、あるいはその場で出会った参加者同士で自己紹介しながらなど、実に多様な世代が交流する場となった。特にプレゼンに参加した小・中・高・大学生が時間をかけてじっくり思考しながら振り返りを記述していた姿が印象的であった。１日の学びや出会いを想起しながら、自分の言葉で一生懸命に書き表している様子だった。対話の場面では、笑顔や相槌が多くのグループで見られ、会場全体が温かな雰囲気であった。あるグループでは、「最初は人と話すことに緊張したけれど自分の思いを伝えられて嬉しかった」と自身の気持ちの変化を素直に振り返る姿が、また、別のグループでは、聞き手が「それは具体的にどういうことですか？」と詳細を引き出す質問をするなど、参加者の想いの表出をサポートする姿も見られた。時間の都合で予定を変更し、プレゼンテーション

の表彰式後に休憩を挟まずそのまま続けた本プログラムであったが、参加者は疲れた表情も見せず熱心に語り合い、時間が足りないくらいであった。ワークシートの記述を見ると、「今日のＯＮＥ　ＷＯＲＤ」には参加者それぞれの視点で心に残った学び・言葉・メッセージが選び抜かれており、「明日からの一歩」については等身大の自分にできる行動や意識が、決意をもって書き記されていた。中には、他者から大きな刺激を受け、「今からでもすぐに行動したい！」とのパッションが文字からも窺える記述もあった。

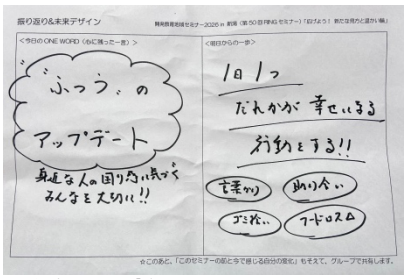
２）参加者のワークシートより一部抜粋（① 今日のＯＮＥ　ＷＯＲＤ、② 明日からの一歩）

- ①自分自身の見方の変化を大切にするコト。②世界に目を向けるというコト。
- ①「大人が子どもを引っ張る電車型ではなく、子どもが行動し、大人がそれをサポートする自動車型」という言葉が心に残りました。②小さなことから自分が動く！！
- ①まだ間に合う。（「世界100人村」のワークショップで聞いた一言。ここから、プレゼンテーションなどを通して、色々な方と関わり、相手を理解していけば、絶対にまだ間に合うと思ったから）②もっともっと色々な人と関わろうとする。
- ①「地球に優しく」「自分にできる一歩目」② まずは食材を買う時に産地を見たり、発生するゴミが少ないものを買ったりすることを意識したいです！
- ①“ふつう”のアップデート（身近な人の困り感に気づく。みんなを大切に！！）②１日１つ誰かが幸せになる行動をする！！（言葉がけ、助け合い、ゴミ拾い、フードロス△）
- ①とらえ直す②新たな見方、問いを投げかける
- ①世界のみんなが笑顔で平等であってほしいから。②原点を見つめ直し、これからも挑戦していきます！！今できること、小さな一歩から。
- ①課題を与えるのが指導者　課題を解決するのが子ども　笑顔を取り戻す！ ②地域クラブたち上げの方向性立案・プレゼン！子どもが主役の地域連携づくり！地域連携担当教員として！
- ①“ふつうって何？”“大人の責任”自分に言われている“身近にできることを”②もっと話す。世代を越えて学ぶ。

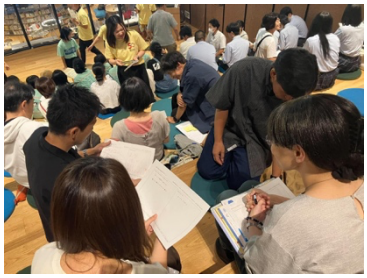
４．プログラムを終えて

「振り返りと未来デザイン」に接続させるために実施したことがある。１日を通して、参加者がそれぞれのプログラムで得た気づきや学び等をホットなうちに付箋に書き留めてもらい、それを共有するための「振り返り掲示ボード」を設置したことである。休憩時間に付箋の記述をじっくり読む方や、各プログラムの付箋を横断的に読み進める方もいたようである。参加者それぞれの「学び方・捉え方の多様性」はとても興味深い。それが自分とは異なる立場や世代、経験を積んできた方では尚更多くの気づきがあるはずである。「振り返りと未来デザイン」は15分間と非常に短時間ではあったが、参加者同士の対話の様子やワークシートの記述を見ても、「自分とは異なる多様な他者との意見共有」を通して、新たな気づきや刺激が得られるとともに、「これからの未来に前向きに向かおうとする一歩」を、参加者同士で温かく勇気づけ合うような場となったのではないかと思う。

（報告者：増田　有貴）



参加者からの「今日のＯＮＥ　ＷＯＲＤ」と「明日からの一歩」の記述



近くの座席の参加者と対話している場面。ワークシートを見せながらじっくり思いを伝えています。ＲＩＮＧメンバーも会場全体を周りながら笑顔でサポート

参加者アンケートおよび実行委員会ふりかえり会議報告

実施日時：９月 13 日～９月 30 日
場所：オンライン（Google form を活用したふりかえりアンケートを実施、参加者アンケートは一部紙で回収）

１．参加者アンケートより

１） 年代
10 代 27.8%、20 代 11.1%、30 代 8.3%、40 代 25%、50 代 11.1%、60 代以上 16.7%

２）所属
教員、小学生、中学生、高校生、大学生・大学院生、保護者、議員、ＪＩＣＡ関係者など

３） 参加したきっかけ（上位３つ）
知人・友人より、ＲＩＮＧの SNS、所属校の先生からの勧め

４） セミナー全体の満足度
大変満足 86.1%、まあまあ満足 8.3%、やや満足 2.8%

５） 感想や学び、今後に活かしたいことなど
・世界の見方を変えて色んな視点を持ってこれからもできることを頑張っていきたい。
・今回は世代のバランスがとても良かった。特に若者たちの参加する様子が輝いていた。
・よりよい世界にしようとの熱い思いをもつ方々が集って、話と輪を広げることができ、大変よい１日になった。
・子どもが初めてプレゼンに参加した。この日のために、学校以外の場でも自分の思いを深め、仲間と意見を出し合って作り上げていく姿を見て驚いた。
・100 人の村のワークショップに参加して、数字で貧富の差が歴然と表れたのはショックだった。この格差を埋めるのに自分に何が出来るのか考えるきっかけになった。
・午前中のワークショップから基調講演、そしてプレゼンテーションコンテストまで、全ての内容に通じるものがあり、参加者それぞれが学びを得ることができたように思う。多様な世代が 100 名以上集い、対話し、学び合ったあの場は熱気に満ちていた。特に若い世代の力強い眼差しで会場に訴える姿に感動した。また、ＲＩＮＧの活動 10 年を振り返る場面もあり、感慨深かった。今日をきっかけに、平和を願い、そこに向かおうとする仲間の輪が広がっていくことと思う。本当に素晴らしい時間だった。
・知識は得た。ではどう動くかが相変わらずの課題。
・学校で生活をしていると無意識のうちに「普通」に縛られ、時には子ども達を傷つけてしまっているのかもしれないと思った。大人が今日のように様々な視点で考えることができれば、救われる子が沢山いると思った。まずは目の前にある普通を疑うことからはじめてみたい。
・こういう機会が新しい学びの気づきの場になる。多くの方と話ができ、パワー充電できた。高校生から小学生の学びの姿を見ることができ、新鮮だった。
・普段考えることがないことを普段関わることのない人たちと話すことができ、とても面白かった。遠いと思っていた話が、実は、身近でという気づきがとても多く、学校で学べない内容でとても楽しかった。
・自分たちで１から考えて調べたので、新しい気づきや事実を知ることができた。それを発表することでみんなにも考えなどを共有できたのでよかった。また、他の人のプレゼ

ンを聴くことで、新たな視点を発見できて、自分の考えを広げるきっかけとなった。
・自身の活動の中で国際理解教育や学校経営に関わっているが、その中で大切なのは自身のアイデンティティーをしっかり構築することだと思った。そのためには、色々な価値観の方と触れ合い、関わりを通して作り上げたいと思う。また、遠くに目を向けるだけでなく、近場にフォーカスした取り組みもこれから尽力していきたい。

２．実行委員会ふりかえりより

２―１．良かった点・成果

１）運営面

開発教育地域セミナー2026 in 新潟の開催にあたり、実行委員がグループごとに役割を分担し、それぞれが主体的に準備・運営に携わることができた。初めての１日開催に加え、複数会場でのワークショップやプレゼンテーションコンテストの実施など、運営面での工夫が求められたが、大きな事故やトラブルもなく、円滑に進行することができた。また、普段は県内各地域に在住しているメンバーが開催地である長岡市に集合したことで、運営を通してメンバー同士のコミュニケーションも深まる時間となった。実行委員からは「多くのメンバーが参加し、メンバー間の交流もできてよかった」という声が挙がっていた。共通のスタッフＴシャツも制作し、一体感をもってセミナーを盛り上げることができた。実行委員一人ひとりにとっても、大きなセミナーを運営することを通して、貴重な経験や達成感を得る機会となった。

２）セミナーの内容面

① 多様な学びと参加の機会の創出

３つのワークショップ、基調講演、プレゼンテーションコンテストとプログラムを充実させたことで、参加者がそれぞれの関心に応じて学び、体験し、考えを表現できる多様な機会を創ることができた。実行委員内でも「聞いて終わりではなく、ワークショップによって体験し、講演によって知り、プレコンによって表現するという、多様な参加の仕方が用意されていて、参加者の参加度の高い場だった」という感想が挙がっていた。長時間の企画であったが、各プログラムにおいて、参加者が受け身にならず、主体的に関わることのできる充実した時間になった。

② 多世代・多様な立場の参加者による交流と学び合い

当日は、120 名ほどの参加者が集まり、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人、シニア世代まで、幅広い年代の参加が実現した。参加者からも「これほどの多世代でミライエステップ（メイン会場）が満席になるのを見たのは久しぶりだ。すごい」と率直な感想をいただくなど、参加者層が多様であったことが今回の成果の１つとなったと実感する。

また、年齢だけでなく、所属や職業、参加動機なども異なる方々が、立場を超えて対話し、互いの考えや経験から学び合う貴重な場となった。１日を通したプログラムの中に、参加者同士が顔を合わせ、交流する機会を多く設けられたことも成果の一つである。

③ 子ども・若者の参加と発信の場の創出

実行委員のふりかえりの中でも特に成果として挙がったのが、新たな試みとして実施したプレゼンテーションコンテストである。参加者–特に小・中・高校生や若い世代の方々が、自分たちの思いや考えを表現する場の企画、というＲＩＮＧの活動の新たな可能性を感じることができた挑戦となった。また、プレゼンテーションコンテストをきっかけに、従来のセミナーでは参加につながりにくかった子どもや若い世代、親子の参加が実現し、参加者層の拡大につながった。子どもたちの率直な考えや思いに触れることは、他の参加者にとっても新たな気づきや学びを得る機会となった。

④ 学びの波及とＲＩＮＧの活動の広がり

第１ワークショップ「世界がもし 100 人の村だったら」を担当したメンバーから、「高

校生の参加者が『100 人村を学校でやりたい！』と意気込んで帰ったことが特に印象に残った」というエピソードが共有された。まさにＲＩＮＧの「ミッション」に迫る大きな成果であると感動した。ＲＩＮＧ セミナーのねらいの１つとして、教育現場での開発教育・国際理解教育の実践の広がりを期待しているが、教員だけでなく、学びを得た学び手からも、次は自分が伝えたい、というメッセージを受け取ることができたことは、自分たちの活動の意義を再認識するとともに、今後の目標を考えるきっかけにもなった。

２―２．課題・今後に向けた改善点

１）運営面

実行委員で役割を分担して準備・運営に取り組んだ一方で、一部に業務や責任が集中する状況が見られた。多くのメンバーから、今後も継続的にセミナーを開催していくためには、特定のメンバーに過度な負担がかからない運営体制づくりが必要である、という声がふりかえりの中で挙がっていた。それぞれ仕事や生活がある中で、自身の余白・余力の中で、こうした活動に携わりたいと思っているメンバーである。負担すぎず、できる中でできることを、できないときには気軽にヘルプを出せる関係性の中で、地道にやっていくことが活動の持続性を考えるうえで重要な点であると実感している。また、それを調整していくことが、中心メンバー（委員長、副委員長）の役割であることも再認識した。

また、使用会場について、備品の保管場所や設備の使用方法などを十分に把握できていない面があったことが反省点として挙げられた。今回は大きな支障なく運営することができたものの、今後は会場設備や備品に関する情報を事前に共有し、スタッフが安心して対応できるよう準備を進める必要がある。また、司会進行の台本や写真撮影・使用に関するルールなどについても、事前に確認・共有しておくことが望ましいといった、細かな気づきも共有された。

２）セミナーの内容面

① プログラムの時間配分と振り返りの充実

充実したプログラムを実施できた一方で、全体を通して時間的な余裕が少なく、休憩や参加者同士の交流、学びを振り返る時間を十分に確保できなかった。実行委員内では、最後の全体振り返りが駆け足となったことが「もったいなく感じた」という声もあった。プログラムの内容や時間を精選したうえで、振り返りとのバランスを検討することが今後の改善点である。また、展示物や振り返りの記録も充実させていたが、参加者だけでなく実行委員自身も、それらをじっくり見たり、見ながら自由に対話したりできる時間を十分にとることができなかった。ＲＩＮＧ セミナーで大切にしてきた「まったりタイム」のような余白を十分に確保した余裕のあるプログラム構成を今後工夫していきたい。

② 多世代・多様な立場の参加者による交流と学び合い

小学生からシニア世代まで幅広い年代の参加があったことを踏まえ、ワークショップ等の内容や説明方法について、工夫が必要であるという声も反省点として挙がった。特に、子どもたちにも理解しやすい言葉や具体例を用いるなど、参加者の年齢や経験に応じた配慮が必要である、という点は次回以降にも活かしたい。多様な参加者が同じ場で学び合うというセミナーの特色を生かしながら、誰もが主体的に参加できるプログラムづくりを大切にしたい。

③ 参加者の広がりと関係機関との連携

幅広い年代や立場の方々が参加した一方で、これまでＲＩＮＧとつながりのなかった学校教員や地域の関係機関からの参加は限定的であった。今後は、情報発信や周知方法を工夫するとともに、母体である「にいがたＮＧＯネットワーク」をはじめとした関係機関との連携を深め、新たなつながりづくりを促進していきたい。

（報告者：関　愛）

資料

実行委員会スケジュール

期日	実施内容
４月 19 日	第１回実行委員会（オンライン：顔合わせ、計画相談）
４月 24 日	ＤＥＡＲに実施計画提出、講師・会場調整開始
５月 31 日	第２回実行委員会（オンライン：実施計画確認、役割分担の決定）
６月	各担当で内容立案、講師・会場調整、広報媒体（チラシ、ＳＮＳ）作成開始
６月 28 日	第３回実行委員会（オンライン：実施計画詳細確認、進捗状況の確認）
７月上旬	ＳＮＳで広報開始
８月７日	チラシ発送、会場確認①
８月９日	地域セミナーネットワーク会議①（東京：小黒・関・西家が参加）
８月 23 日	第４回実行委員会（オンライン：進捗確認、プレコン参加チーム確認）
９月５日	第５回実行委員会（オンライン：最終確認）
９月 11 日	会場確認②
９月 12 日	地域セミナー実施
９月下旬	・実行委員振り返り（オンラインフォームを通じて実施） ・参加者アンケートと実行委員振り返り集約完了
10 月中旬	報告書の原稿集約完了
11 月上旬	ＤＥＡＲに報告書提出
３月 13 日	地域セミナーネットワーク会議②（オンライン：小黒・関・西家が参加）

実行委員会メンバー・講師・協力者・参加者一覧



セミナー当日の朝に集まったＲＩＮＧ実行委員

ＲＩＮＧ実行委員	◎実行委員長：小黒淳一、〇副実行委員長：関愛（高校教員） 委員：増田有貴（中学校教員）、渡辺登（小学校教員）、 関川芙美香（小学校教員）、水澤真也（小学校教員）、 宮由衣（会社役員）、池亀元喜（高校教員）、 渡邊恋子（小学校教員）、西家久美子（小学校教員）、 上條正太郎（小学校教員、School Voice Project）、 大山達也（ＪＩＣＡ新潟デスク）、高橋美里（議員）、 大野めぐみ（英語教室講師）、五百川将（団体職員）
開発教育協会	中村絵乃、西平久美子、佐藤晴香
基調講演講師	武田緑（学校ＤＥ＆Ｉコンサルタント、School Voice Project）
ワークショップ協力者	【第２ワークショップ】 宮本裕美、阿部萌未、皆川晴弥、反町友翼、杉谷芽依、今城光、 武藤奈々花 （以上、国際交流ファシリテーター新潟国際情報大学チーム） 【第３ワークショップ】 上田夏子（まちまち、ときどきカフェ。店主）
プレコン協力者	【審査委員・全体講評】 佐藤真久（東京都市大学大学院） 【グローカルクイズ大会ゲスト】 佐々木茉歩（長岡造形大学大学院生・長岡市地域づくり支援員） ミルラ（長岡技術科学大学）、シャロン（広井工機）

当日参加者・・・１１８名

【内訳】幼児、小学生、中学生、高校生、大学生、教員、市民、
社会教育委員、NPO・NGO 関係者、地域国際化協会、
地域おこし協力隊、フリーランスパフォーマー、
プレコン参加者関係者（家族、学校職員）、ＪＩＣＡ関係者、
プレコン協力者、ワークショップ協力者（大学関係者等）、
基調講演講師、開発教育協会、ＲＩＮＧ実行委員

執筆者一覧

○挨拶・プログラム　　小黒淳一（ＲＩＮＧ企画委員長）

○各プログラム報告
- ・第１ワークショップ　渡邊恋子（ＲＩＮＧ、三条市立大浦小学校教諭）
- ・第２ワークショップ　池亀元喜（ＲＩＮＧ、新潟県立高田農業高等学校教諭）
- ・第３ワークショップ　大山達也（ＲＩＮＧ、ＪＩＣＡ新潟デスク）
- ・基調講演　西家久美子（ＲＩＮＧ、魚沼市立湯之谷小学校教諭）
- ・発表会（プレコン）　渡辺登（ＲＩＮＧ、魚沼市立湯之谷小学校校長）
- ・全体会（振り返り）　増田有貴（ＲＩＮＧ企画副委員長、阿賀野市立水原中学校教諭）

○実行委員会振り返り　水澤真也（ＲＩＮＧ、長岡市立中之島中央小学校教諭）
関愛（ＲＩＮＧ企画副委員長、高校教員）

開発教育地域セミナー2026 in 新潟 報告書
「広げよう！ 新たな見方と温かい輪」

発行日：2026 年 11 月 9 日

編集・発行：
認定 NPO 法人開発教育協会/開発教育地域セミナー2026in 新潟 実行委員会

112-0022　東京都文京区小石川 2-17-41 TCC２号館別棟
TEL:03-5844-3630
E-mail: main@dear.or.jp
URL：https://www.dear.or.jp/